



## ○「やり切った先に見える景色」

～いざや磨かんともがらよ～…それぞれが切磋琢磨を続け臨んだ県総体が、学校対抗総合3位という輝かしい成績を残して幕を閉じました。多くの3年生は、受験への「切り替え」となります。

とある合格体験記の話です。「吹奏楽コンクールが夏にあり、多くの仲間が受験勉強一色になっている中で焦る気持ちもあったが、思い切って部活動に振り切って頑張った。やり切ったことが、自信やモチベーションにつながり、残り期間を受験勉強一色に振り切って全力投球できた。その結果目標大学に合格することができた。」という内容でした。

ひとつのことをやりぬくこと、やり切ること、振り切ってがんばることはとても大事です。

入学式の式辞では、「なにが課題か、どうすれば課題が解決できるかを自分の頭で考え抜いて、なすべきことが見つかったら多様な仲間と協力し合って挑戦していくことが大切です。」という話をしました。つまり、考え抜くことの大切さについて話しました。

やり切った者、振り切ってがんばった者しか見えない景色や分からない境地があります。それが成長につながり、次への自信にもなるはずです。

ちなみに、「切り替え」という言葉を使いましたが、気持ちに「区切り」をつけることとは同じではないと思っています。やり切った、後悔はないと思える人は、総体からの切り替えがしやすいかもしれません。しかし、何をもってやり切ったとするか、またそう思えるかは人によって様々です。結果が出たか、出なかったではないかもしれません。

私たちは、日々の生活の中でいろんな区切りをつけながら前に進んでいます。今週は家庭学習時間調査を行っていますが、日々の振り返りをする中で、3点(起床時間、学習開始時間、就寝時間)の時間を固定して、生活に区切り、つまり良いリズムをつけることが大事であることに気づかせる。そうしたことも調査目的の一つです。

しかし、無理に区切りをつける必要がないこともあるのではないのでしょうか。県総体後の気持ちの区切りもその一つです。区切りをつけることと、そのことを忘れることとは違います。自分の中で無理に満足できなかつた結果や消化しきれない思いにふたをすることが区切りをつけることではありません。

これまでの練習や県総体での結果に満足している選手とそうでない選手、レギュラー選手とそうでない選手、団体で出場した選手と出場せずに終わった選手、自分のせいで負けたと思い込んでいる選手や劣勢でも粘れた選手、強気でいけた選手と弱気で守り



に入ってしまった選手、初心者で始めた選手と中学校から続けてきた選手・・・総体後の思いは一人一人違っているはずで。

昔部活動の顧問をしていた時に、優勝候補と言われながら、団体戦の初戦で思わぬ相手に負けたことがありました。全国総体に行くことを目標に厳しい練習を乗り越えてきただけに、選手たちの落胆ぶりは言葉にできないほどでした。これは、あとで保護者に聞いた話です。「キャプテンをしていた子どもに、帰宅後もう一度大会会場に行きたいと言われ連れて行った。日が暮れるまで涙を流しながら黙って会場を見つめていた。声をかけることもできなかった。」・・・そんなことがあったそうです。もう一度会場に行くことで、自分の気持ちに折り合いをつけようとしたのだと思います。この敗戦は、準決勝や決勝だけを想定して練習をしてきた顧問の責任だと今でも思っていますが、生徒にとっては誰の責任かが大事でなく、がんばってきた結果とその過程、その両方が自分の目標としてきたレベルに到達できたかどうかが大変であり、過程が満足であっても結果が不満足なら、なかなか気持ちに折り合いをつけにくいのだと思います。結果は変えられないし、過程も変えることはできません。でも、これからのことを変えていくことはできます。

県総体や部活動に残した思いがあるのなら、無理やり思いにふたをして、区切りをつけたことにして前に進もうとすると、逆に前に進みにくくなる場合があります。つらい思いは、時間と共に、思い出に変わったり、より強い思いになってそれが違う意欲に変わったりもします。大事なことは「区切り」をつけることでなく、目の前にある次にすべきことに、きちんと取りくんでいけるように「切り替え」ていけるかどうかです。

私は、高校からソフトテニスをはじめ、最後の県総体では団体戦の初戦でシード校に思わぬ勝利をしました。恥ずかしながら、公式戦で勝利したのは個人戦も含め団体戦でのその時の1勝のみです。練習も適当で、キャプテンでありながら楽しければそれで良いくらいのモチベーションでした。なので、大会前に勝ち負けを語れるレベルではありませんでした。でもその1勝で人生が変わったと思っています。もっと練習をすればもっと勝つたのではないか。練習がいい加減だったのは、負けた時の口実が欲しかったからではないか。つまり、一生懸命やっても報われないことがあることに最初から逃げたり避けたりしていたということです。そのことにはっきり気づいたのはその後大学受験に失敗して浪人した時です。受験勉強がいい加減だったのは、一生懸命やって失敗することを避けたからだと思っています。部活動も勉強も最初から言い訳や逃げ道を用意していたのです。

挑戦をしなければ、失敗もしない。でも成長も成功もしない。

つらい気持ちや悲しい気持ちに、無理に区切りをつける必要はないと思っています。いつか自分の気持ちに折り合いが付き、そのことが意欲につながる時がきっとあります。大事なことは目の前のことに志を高く持って取り組むことだと思っています。